

狭い門から入れ

主イエスは「山上の説教」の最後の段階で、御自分に従ってくる弟子たちに「狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない」と語られ、この世においてご自分の弟子たちがどのような心構えで生きるべきであるかを「門」と「道」の例えをもって教えられた。

神の国の民とされた者のこの世における道、すなわち信仰の道は、「命に至る道」であるが、それは決して、この世が期待するような安易なものではなく、自己犠牲と自己否定という重大な決心を伴う「狭い門」「細い道」であることを語られた。

これと並行記事のあるルカによる福音書では少し違った文脈でこのことが語られている(13:22～24)。或る人が「主よ、救われる人は少ないのですか」と尋ねたとき、主イエスは「狭い戸口から入るように努めなさい。言っておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ」と答えられた。ここで“努めなさい”と訳されている原語は「戦い」を表す軍隊用語であり、また「奮闘」を意味する競技用語である(ヨハネ18:36、コロサイ1:29、第1テモテ6:12、第2テモテ4:7、第1コリント9:25)。

主は「門」「道」の例えによって分かり易いイメージを与えられた。私たちの前には二つの道がある。一方は狭くて細いが命に至る道であり、他方は広くて快適であるが滅びに至る道である。或る意味で、私たちの人生は、この二つの中のいずれかを信仰をもって選び取らなければならない選択の道であると言える。

そして、キリスト者は、どのような状況の中にあっても、ちよūd兵士が勝利を旨として「戦う」ように、また競技者が栄冠を旨としてひたすら「奮闘する」ように、「力を尽くして努力し」、命の道を歩み続けなければならない、と主は言われる。これは私たちに対するを励ましの言葉である。

キリストの救いの福音(キリスト教信仰)はしばしば「道」と呼ばれた(使徒言行録9:2、18:25～26)。また、イエスご自身、御自分を「道」であり「真理」であり「命」であり、また「門」であると教えられた(ヨハネ14:6:10:7、9)。そして「だれでもわたしによらないでは、父のもとに行くことはできない」と言われた(ヨハネ14:6)。イエスをキリスト(メシア)として受け入れ、彼を主と仰ぎ、従う道こそは「命に至る」道であり、たといそれは狭く細くとも、それを忍耐をもって歩む者を、確実に「父のもと」に導く命の道なのである。

使徒パウロも次のように言っている。「兄弟たちよ。わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです」(フィリピ3:13～14)。目標を目指してひたすら走り続けるランナーのように、私たちも、御国の栄光を目指して、キリストにあって「命の道」をひたすらに走り続けるのである。